

乳用牛の蹄底潰瘍への開放性ウエットドレッシング療法の応用

阪神基幹家畜診療所 八多診療所

○井上雅介 泉 弘樹 関師尚子 小田修一 山崎 肇

乳用牛の肢蹄疾患は、生産性の低下、淘汰率の増加による経済的損失は甚大であり、なかでも重度の跛行を呈する蹄底潰瘍が最も重要と考えられている。

今回、人医療の褥創治療に用いられている開放性ウエットドレッシング療法を蹄底潰瘍治療へ応用し良好な結果を得たので報告する。

材料および方法

1. 調査期間 2012 年 4 月～12 月

2. 調査対象

管内 2 農場で跛行を呈する肢蹄疾患のうち重度の蹄底潰瘍を認めた 11 頭に実施。

3. 蹄底潰瘍治療手技（開放性ウエットドレッシング療法）

- 1) 患肢の両側蹄を削蹄。潰瘍部の遊離角質を除去。蹄底蹄球接合部から蹄球にかけての潰瘍ではヒールレスメソッド実施。
- 2) OTC 可溶散 50%0.3 g 混入白色ワセリン塗布。
- 3) 両側蹄を穴あきポリエチレン袋（台所用水切り袋）で被覆。
- 4) 潰瘍部に厚手の生理用ナプキン装着。
- 5) ヴェトラップバンデージングテープでテーピング後、テーピングテープで脱落予防。
- 6) 被覆部全体に蹄病軟膏塗布。

結果

蹄病処置実施後 2～3 日で 6/11 頭(54.5%)の跛行は軽減し、5～7 日後の潰瘍部は上皮化を認め患肢の負重は 9/11 頭(81.8%)が良化した。10～14 日後の潰瘍部は柔らかい角質でほぼ覆われ跛行は消失し全頭治癒を認めた。

まとめ

開放性ウエットドレッシング療法は、浸出液や膿汁の排泄を促すとともに創面を湿潤環境に保ち、創の修復を進行させるとされており、人医療の褥創治療に用いられている。

今回、乳用牛の蹄底潰瘍治療へ応用した結果、蹄底の湿潤環境を保ち、膿汁や浸出液を患部から排泄させ、さらに牛床の汚染状況からの二次感染を予防するとともに、厚手の生理用ナプキンのクッション効果により牛の疼痛を軽減させ、早期治癒を認めた。

重度蹄底潰瘍に応用した開放性ウエットドレッシング療法は、蹄底潰瘍の治癒転帰を早め、患肢の浮揚を目的とした健肢に対するギプス包帯や蹄底ブロックおよびレジンプロック等の高度な技術は必要とせず、臨床現場での応用価値の高い有効な療法であると考ええる。